

NEWS

東北生産性本部

「混迷の日本政治のゆくえ」

2025年度 仙台シンポジウム 9月例会開催

2025年度 仙台シンポジウム9月例会は、ジャーナリスト 鈴木 哲夫 氏 を講師にお迎えし、約50名の参加を得て開催いたしました

■例会（2025年9月19日開催）**講師：ジャーナリスト 鈴木 哲夫 氏****（プロフィールなど）**

福岡県出身。福岡県立小倉高等学校、早稲田大学法学部卒業後、1983 年テレビ西日本入社。報道部記者として警察、自治体を担当。北九州市政、雲仙・普賢岳噴火などを取材。その後、フジテレビに出向し報道局政治部へ。経世会担当、梶山静六、小淵恵三、橋本龍太郎等の番記者を務めた。

1995 年、テレビ西日本から東京メトロポリタンテレビジョンに移籍。『東京 NEWS』ニュースキャスター、ニュースデスク、東京ニュースセンター編集長、報道制作部長を歴任。

2001 年、東京メトロポリタンテレビジョンから株式会社衛星チャンネルに移籍し、報道制作本部チームリーダー、報道制作局報道部長を務めた。2007 年 12 月、BS11 に再度移籍し、報道制作部長、執行役員報道局長を歴任。2013 年 6 月よりフリージャーナリストとなり現在に至る。ゴゴスマ～GOGO! Smile! ～(TBS・CBC)の他多数、コメンテーターとして TV ラジオに出演中。

2021 年時点では河野太郎に約 20 年間取材してきた。著書の「シン・防災論」は 2024 年尾崎行雄記念財団のブックオブザイヤーメディア部門で大賞を受賞。

【ご講演要旨】

政治報道の記事の半分は本当で半分は嘘。石破総理退任の記事の誤報が相次いだ、本人に聞いたものではない。観測気球のように世論の反応を見るためにわざと書かせることもある。政治記事はあくまで参考に、自分でいろいろな情報かき集めて政治判断をすることが望ましい。

石破さんとは 25 年の付き合いになるが、なぜ取材を続けたかー。自身にはへそ曲がりな性格があり、選挙の当選や大臣になるなど勝った人に取材陣が群がるのが永田町。自身はその瞬間から、興味がなくなってしまうが、石破茂は総裁選で常に負け続けた。総裁選 5 回目で当選したが、それまで世論では支持されながらも、反自民と言われ、総裁になれなかったことで興味を持つことが出来た。

当選以降、少なくとも週に 1 回から 2 回はメールや電話で直接取材をしていたが、政権運営が彼らしくない。何が出来たのかといえ、森友学園問題の判決について控訴を断念したことくらい。やりたい政策や考えもあるが、実行するにも仲間がいないこと、財務省の力が強いことなど、直接取材をしたからこそその本音の総理の声を聞くことが出来ました。



「石破おろし」が連日報道される中、8月に続投を決意した2つの理由に、4,000 品目からなるトランプ関税への対応や戦後80年談話を出すためにも、今辞めるわけにいかないと聞いた。23日の麻生、菅、岸田との会談でも、退任の話しは一言も言っていないにも関わらず、退任の号外が出たことで、続投への強い決意に火がついたようだ。

戦後80年談話に対する、政治家や国民一人一人に対する思いや自身の考えにも

触れつつ、石破総理は、旧安倍派から非難、反対されながらも、文民統制の総括、その真意や目的について解説いただきました。

後半は総裁選の行方に触れ、高市、小泉の決選投票なるとの予想から、各議員はその後の政策を見据えた投票になると解説。ダークホースの位置づけで小泉に代わって林との決戦投票も、条件次第ではあり得るのではないかと。小泉陣営が政策通の経験者を徐々に味方につけて、前回の敗戦の教訓を活かし選挙戦略が展開されて行けば、決選投票は予定通りとなるだろう。その後の政権運営は、数にものを言わせてきた自民党から、多党化によってどこと連立を組むのかに注目が集まる。選挙中は対立してても、選挙後は連立に歩み寄る姿勢は、民意に反していると感じる。個別の政策は達成しつつも、国家そのものは変わらない。ヨーロッパのような政党ブロックによる運営や、小選挙区に戻すことが望ましい。

以上、大変有意義なご講演ありがとうございました。